

農業のゆくえ

..... 広報座談会



格段に少ない、人と合う機会、積極性を持つて花嫁を

▼次に、「農家の花嫁不足」が以前からいわれています。若い人たち同志が話し合う機会が少ない、など、その原因はいろいろ考えられますが、関係機関ではそのような機会を作ることの工夫はしていませんか。

▼〈市農協〉そのことは常に頭にあるが、まだ具体的に実施したことはありません。しかし、表情をみると、農業にとって非常に重要な問題となつてきています。

▼農業はその性質上、どうしても人と付き合う機会が他の職業と違って格段に少ないので、結婚から

遠ざかるということもいえます。

▼農家の独身者に積極性が不足しているのではないかと、休みをつくつて花嫁を連れてくるような努力も必要ではないでしょうか。

▼農家に育った女性でも、親が農業をきょうため農家に嫁がせないという例も聞きました。親にも問題はあつてお聞きしますが。

▼若い農業者のみさんの理想論はどうでしょうか。

▼結婚したら妻には自分と同じような農作業はさせたくないですね。

▼無理のいかない程度でいっしょになつてやつてもらいたいと思

農業のよさを見直す必要、今こそ、がんばつて農業を

▼そのほかで気のついたことはありませんか。

▼サラリーマンが一応定年まで勤めたとしても、退職金でそれだけの土地が買えるか。その意味での農家の地位はずいぶん高いと思

▼食糧難もいわれている、まさかのときには農家が強い。機械化も進み、適当な運動にもなり、寿命が長くなることにつながるような気がします。もう少し、農業のよさをみんなが見直す必要があるのではないのでしょうか。

▼米飯給食も検討すべき時期にきたのではないかと、慎重な検討が必要

▼農業から他産業へと、今までに農業人口の減少もずいぶんあつたが、どんなことがあつても農業が

▼私は農業があまり好きではないので、農業をしている人との結婚は考えていません。しかし、恋愛で「決めた人」となら農業もします。

▼私は農業はさせません。勤めてくれて、朗らかな女性がいい。

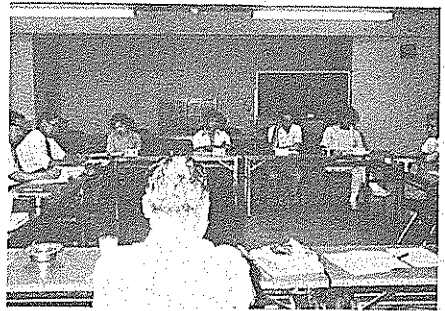
▼農協あたりで「花嫁銀行」的なものを設置したらいいと思います。がんばつて農業をやつたらいいと思います。

▼化学肥料を多く使つた産物は確かに自然のものよりおいしくないので、最近は収入を高めるだけに追われ、「じっくり農業をする」人が激減していると思

▼市内や市外での、農業後継者のグループ交換会などを計画してはどうでしょうか。

▼「農業」のことは、この程度ではもちろん語り尽くせません。しかし、農業は南国市産業の柱です。関係各機関の「指導をお願いする」とともに、若い農業者の飛躍をお祈りします。

今日はどうもありがとうございました。



毎日の農業と相反する「農政」、末端的な解決策探求に終つている

▼「農政」というとつかみどころがない感じがしますが、あまり難しく考えないで日頃感じていることを率直にお話してください。

まず、関係機関から見た「農業」はどうでしょうか。

▼〈普及所〉農業も企業である」といわれて久しいが、企業的にはまだまだ遠いように思います。依然として個別農家の所得向上に重点がおかれているようで、この傾向は今後もしばらく続くでしょう。

所得の面からみると複合経営が主になるでしょうが、生産性の面で種々の無理、無駄が生じてきます。この無理、無駄を省くために

は、問題点を話し合い、解決策をさぐる農家の組織、とくに若い人の組織が必要です。これからの農業経営は、この組織が地域の中心になつて進めていくべきです。後継者難がさげられる昨今だが、誰でもが後継者になつたり、無制限に後継者がなくなるといふことは考えものです。

とにかく、若く条件のそろつた農業者をつくるよう努力していきたいと思

▼〈産経課、農業委員会〉列島改造論以降も都市化の波は南国市を大きく変えつつあるが、古米県下一の穀倉地帯であり将来も田園都市をめざしている

市をめぐらしているのが、農業の振興において南国市は語れません。都市化との調和のとれた土地規制をして優良農地を守り、これからは新しい複合経営をめざしたいと思

農家人口は減少し、個別農家の規模は機械化により拡大しているが、もうこのあたりが限界のようです。これからは「新しい農業の智慧」をさくらなければならぬでしょう。

新しい稲作転換がはじまっていますが、市としてこれ以上の米の減反は絶対うけない方針です。国は減反というよりも、ほかにいくらかでもやるべきことがあるのではないのでしょうか。

▼〈市農協〉水田再編対策など、確かに農政めきでは農業を語れません。農家所得の減少によって農

協の経営も苦しくなつていきます。まず国は、すべての農産物価格の保障をすべきである、農業を続けていこうという意欲をいかに農家にもたすかを、農政担当者は第一に考えなければならぬと思

▼次に若い農業者のみさんのご意見をお聞かせください。

▼国の農業行政には不信感を抱き期待していません。農政がかかわるたびに農家が苦しめられていま

す。個々の農家の希望は、国の制度より手前に大部分ふらふらにかけられていると思うので、そのこぼれた多くの農家を、身近な市役所や市農協が地域にあつた経営ができるよう農家といっしょになつて考えてほしいと思

農業のよさを自分なりにみつめて就業したが、一番苦しいことは

激変が続いている「農業」、一市の基幹産業である農業を、市政のなかにもどのように位置づけていくか、若い担い手がどのように考えているか。

このほど、「農業のゆくえ」と題して、関係者や農業後継者のみなさんにお集まり願つて、農政問題や農業青年の結婚問題について話し合つていただきました。

出席者

- ▷川村一成 (上倉)
- ▷徳橋昭俊 (久礼田)
- ▷遠藤由加利 (国府)
- ▷小松正人 (日章)
- ▷前田説三 (十市)
- ▷農業改良普及所
- ▷南国市農協
- ▷市役所農業委員会
- ▷市役所産業経済課
- ▷広報委員

収入が少ないことです。

▼要するに各家庭の経営が安定すればそれでいいのですが、そんな農家はほとんどないでしょう。苦しい責任は、農家にもあります。例えば、生産物の価格は農家がどうがんばつても決定できない、これは農家にとって一番悲しむべきことです。

▼農政のことはわからないが、私たちが毎日している農業と、今の水田再編対策による米の減反は相反するものだと思います。農政と農作業がしつくり結びつくようなことを考えてもらいたいと思

す。米をやめて何を代わりに栽培したらいいか、その選択を農家のみにさせ、価格の保障はないというのでは、農政不信も当然のことではないでしょうか。

▼若い者が集まっても農政のことまで議論を振りまげない。「もう文句をいって仕方がない」というあきらめがあるようです。それよりも、生産コストを低めたり、増産技術といった末端的な解決策の探求に終つてしまつて現状です。

▼「農政」に対しては、大変きびしいご意見をお聞きしました。関係各機関は、この言葉を今後の指導、援助の参考にしていただき、田園都市・南国市づくりをお願